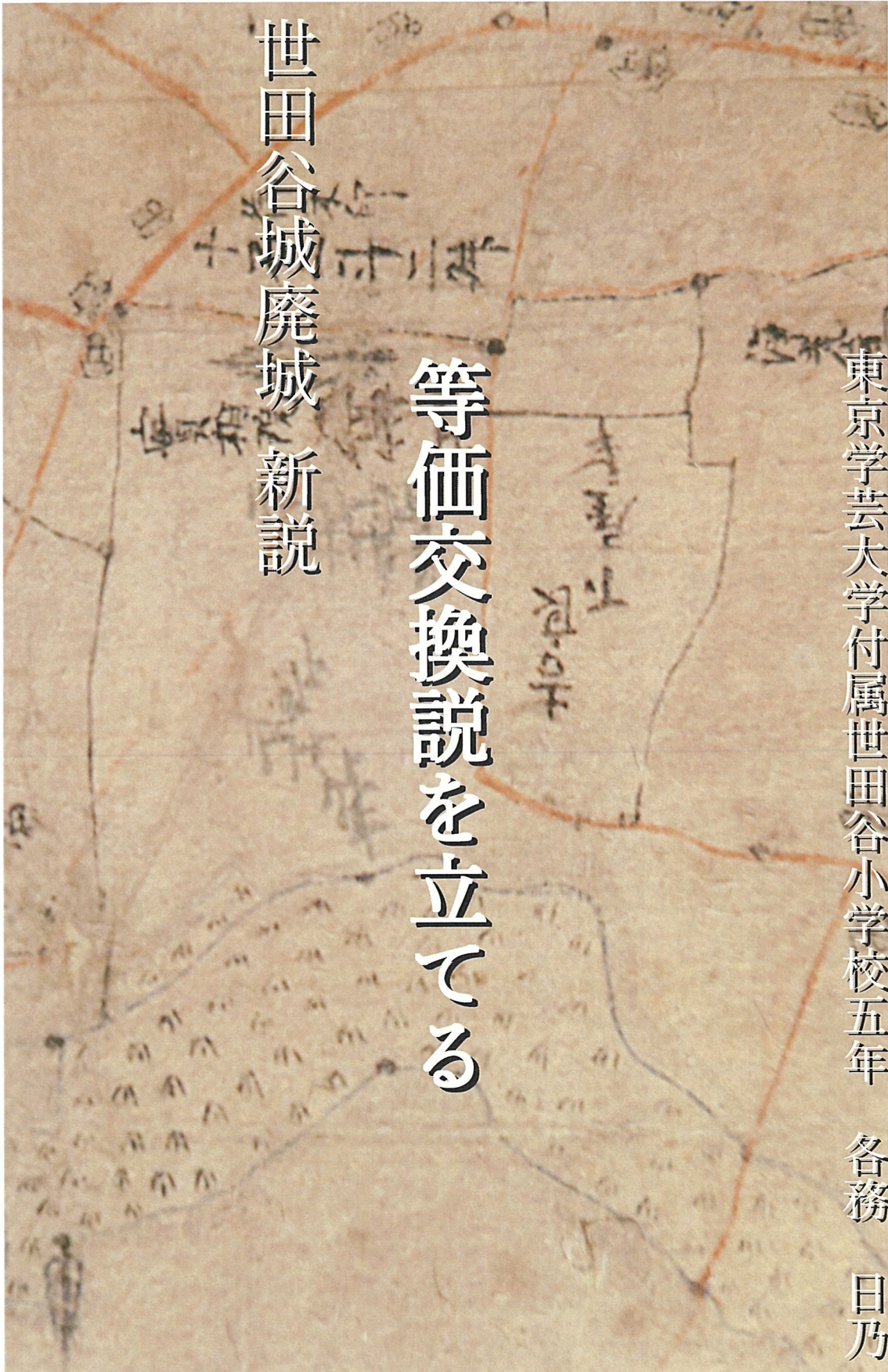
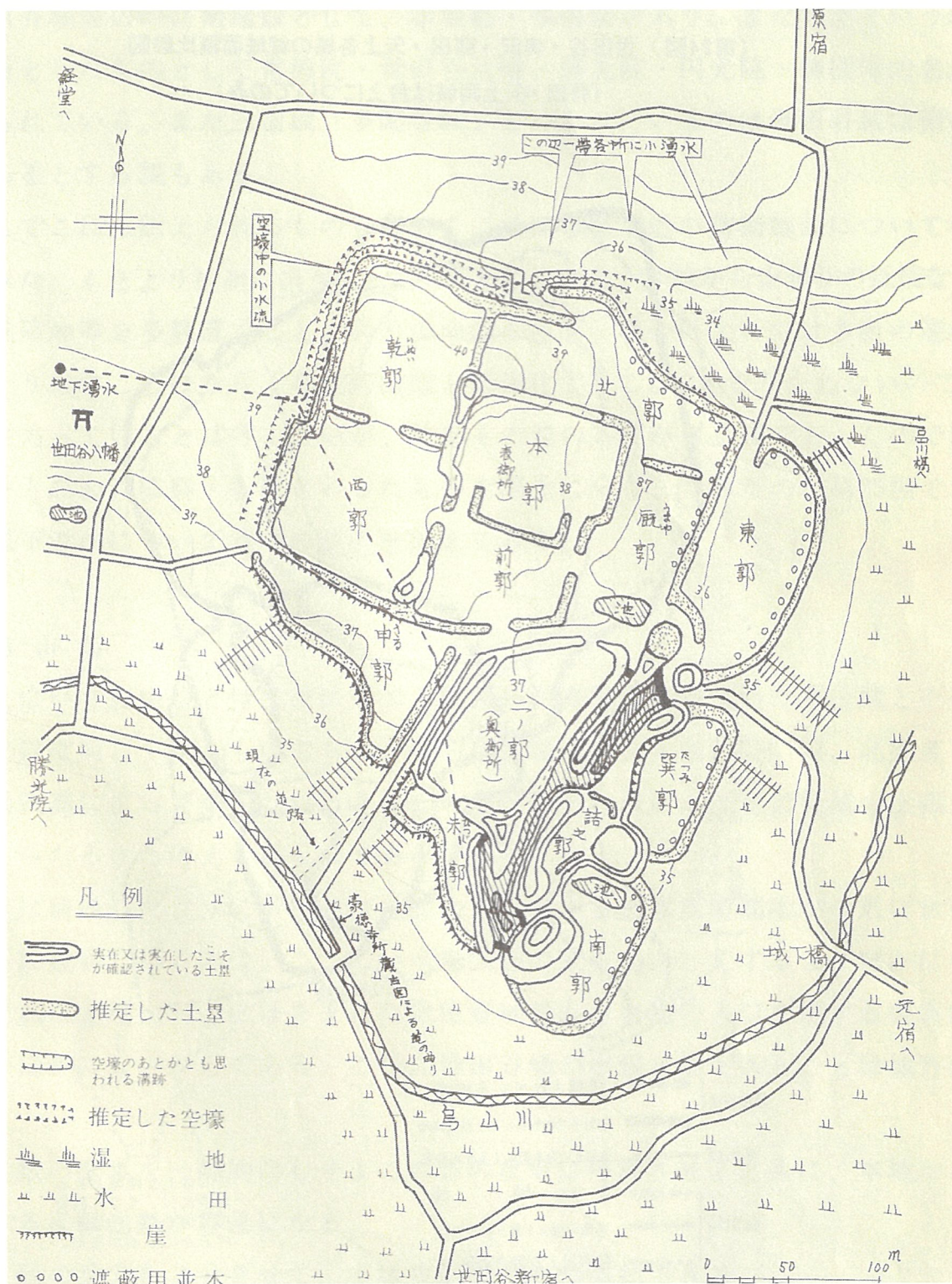


東京学芸大学付属世田谷小学校五年 各務 日乃

等価交換説を立てる

世田谷城廃城新説





世田谷城の想像図(「世田谷の中世城塞」より抜粋)

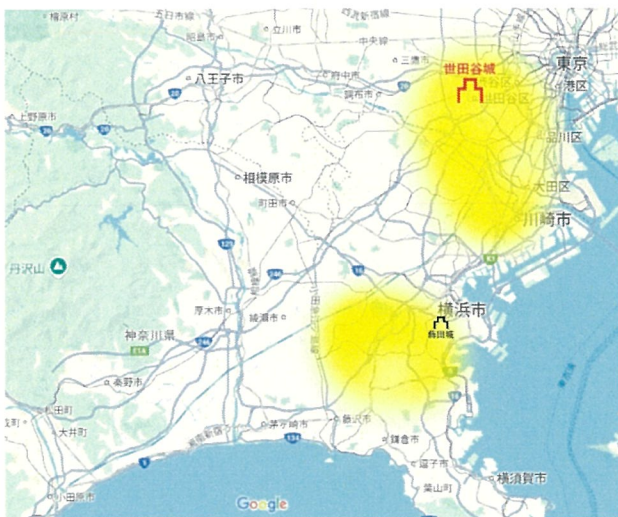
1.はじめに

天正 18 年(1590 年)、豊臣秀吉と後北条との間で起きた小田原合戦により、小田原城は開城し、落城した。その合戦の敗北により、後北条の配下であった吉良氏の居城、世田谷城も接収され、廃城されたとされている。世間では、世田谷城を接収したのは前田利家だと言われていたり、古田織部が世田谷城を開城させたとも言われていたりしている。**どれが本当なのだろうか。接収したのは一体誰なのか。**そう思った筆者は、小田原合戦において世田谷城を誰が開城させ、誰が接収し、どのように廃城となったのかを調べるために資料を集め、歴史博物館や関係箇所に足を運んだりインタビューしたりして調査を試みた。

2. 世田谷城と吉良氏について

世田谷城は交通のようしようにあり、ようがいの地に築かれた城と言われている。戦国時代は小田原から重要な軍事拠点「江戸城」に行く街道の一つ「矢倉沢往還」の宿場・伝馬町だった。世田谷城は関東ローマそのの台地上にあり、北側は北沢川、南側は烏山川、東側はしっ地、西側は烏山川の支流、といった天然のお堀に囲まれていて、川の周りの田んぼは一年中胸までつかるといふ、敵の侵入をこぼむ強固な造りになっている。

1365 年ごろ、吉良治家が世田谷に居館を構えたことが始まりだ。吉良氏は、足利將軍家の血筋をひいている名門であった。そのため、世田谷城は世田谷御所などとも呼ばれていた。



〔図 1〕 世田谷城およその統治範囲（世田谷往古来今 P69 をもとに google マップにて筆者が加筆）

1539 年ごろに「吉良頼康」が、関東で着々と力をつけてきた後北条家と婚姻関係を結んだ。後北条の後ろだてを得た吉良頼康は以降、所領の支配を一気に充実させていった。所領の田畑はもちろんのこと、品川の手運や横浜での塩なども世田谷城・吉良氏が支配していた。吉良氏の城は、世田谷城ともう一つ蒔田城があったが、蒔田城は隠居城的な場所だったので、隠居した吉良頼康が入った。1561 年頃、世田谷城には

頼康の子息「吉良氏朝」が入り、世田谷城領域の政治を行った。

現在、世田谷城は住宅地として開発された部分もあるが、一部は「豪徳寺」の境内になり、一部は「世田谷城址公園」として遺構が残されている。



〔図 2〕 豪徳寺(筆者撮影)



〔図 3〕 世田谷城址公園(筆者撮影)



〔図 4〕 世田谷城址公園(筆者撮影)



〔図 5〕 世田谷城跡(google マップに筆者が赤線加筆)



〔図 6〕三軒茶屋キャロットタワーから世田谷城方面を望む(筆者撮影)

3. 世間で言われている豊臣軍の動きと世田谷城

寛政年間(1789 年～1801 年)に金子直徳が執筆した江戸西北郷土誌「新編若葉の硝」という本を見てみると、天正十八年に前田利家が世田谷城を陥落させたと書かれている。また、山田芳裕が執筆した漫画「へうげもの」には、本田忠勝ら徳川家臣団が世田谷城を囲み古田織部が世田谷城開城の交渉役を担った、ということが表現されている。

「本当にそうなのだろうか」

筆者が発見した世田谷城接収に関する資料はこの二つしかなく、研究的には書かれていないと思われる。「これは筆者が明らかにしたい。」そう思った筆者は、この問いを探究することにした。

4. 前田利家説への反論

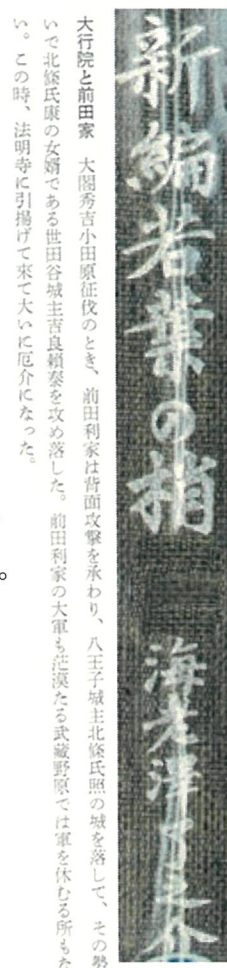
新編若葉の硝には下記のことが書かれている。

「太閤秀吉小田原征伐のとき、前田利家は背面攻撃を承わり、八王子城主北條氏照の城を落として、その勢いで北條氏康の女婿である世田谷城主吉良頼泰を攻め落とした。」

「前田利家の大軍も茫漠たる武蔵野原では軍を休むる所もない。この時、法明寺に引揚げて来て大いに厄介になった。」

つまり、八王子城と世田谷城を陥落させた後に、前田利家軍が法明寺(池袋)によったということが書かれている。それは本当なのだろうか。まずは前田利家の動きを資料から追ってみることにした。

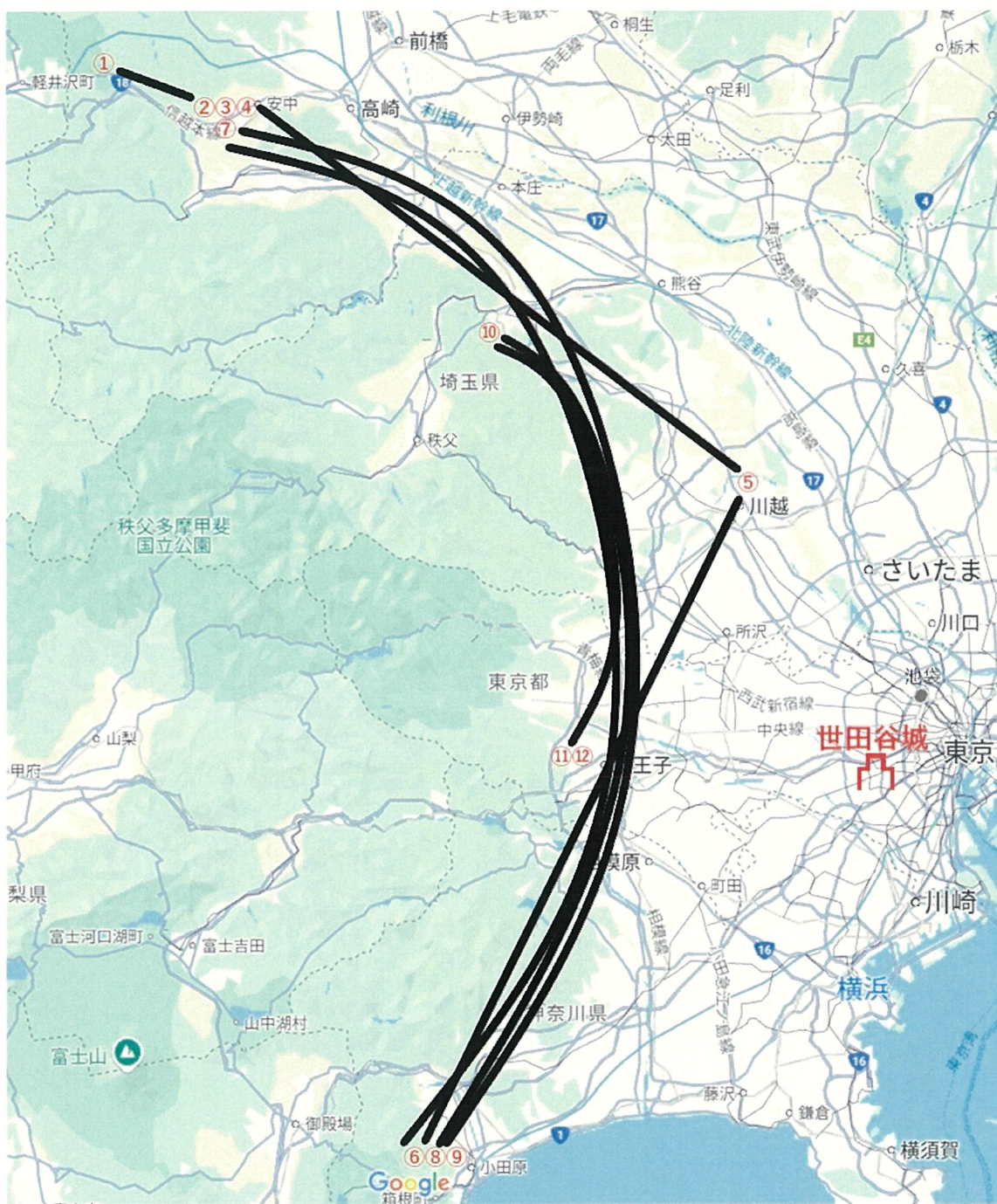
小田原合戦において豊臣秀吉や徳川家康が東海道を進軍している中、前田利家を大将とした上杉景勝や真田昌幸を中心として編成し、北から武蔵に進軍させた隊のことを「北方軍」という。北陸を出発した前田利家と上杉景勝らは、信州で真田昌幸と合流。現軽井沢を経て、関東平野に入っていた。その時の前田利家の動きを時系列の表と地図で表してみた。[図8・9]



[図7] 新編若葉の硝一部抜粋

No.	天正 18 年月日	場所	現代場所
①	3 月下旬	佐久群碓氷峠	群馬県安中市松井田町坂本
②	4 月 7 日	上野松井田城	群馬県安中市松井田町高梨子
③	4 月 20 日	上野松井田城	群馬県安中市松井田町高梨子
④	4 月 22 日	松井田城→小田原	松井田町→小田原市
⑤	4 月 24 日	川越城	埼玉県川越市郭町
⑥	4 月 27 日	小田原→松井田	小田原市→松井田町
⑦	5 月 1 日	上野松井田城	群馬県安中市松井田町高梨子
⑧	6 月 7 日	小田原	神奈川県小田原市城内
⑨	6 月 8 日	小田原→鉢形城	小田原市→寄居町
⑩	6 月 14 日	鉢形城	埼玉県大里郡寄居町大字鉢形
⑪	6 月 23 日	武蔵八王子城	東京都八王子市元八王子町
⑫	6 月 28 日	武蔵八王子城	東京都八王子市元八王子町

[図8] 記録として残っている前田利家の動きを時系列で表してみた表(筆者作成)※月日は利家が確実にその場所にいた日



【図9】記録に残っている前田利家の動きを時系列で表してみた図 筆者作成(google マップに筆者が加筆)

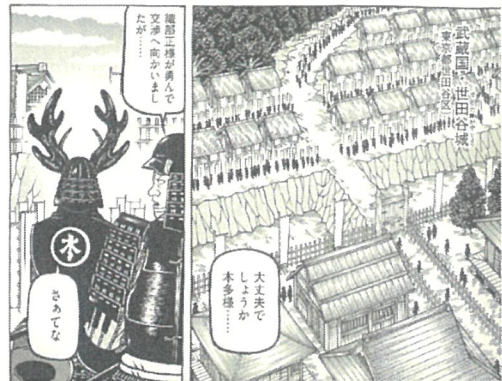
前田利家の動きを見てみると、軽井沢から小田原まで、関東平野の西側を動いているようだ。合戦中に小田原へ2回行っているが、1回目(表④⑥)は降伏した松井田城城主 大道寺重時を松井田城から小田原に連れて行き、もう一度松井田城に帰った時の話。2回目(表⑦⑨)は、豊臣秀吉と伊達政宗の取り持ち役を担うため、小田原に行って、再び北関東(鉢形)に戻った時の話。両方とも、本軍は松井田や鉢形に置いたまま、自分は手勢で小田原に行った。しかも、日程的に、1~2日で行き来の行程を済ましている。小田原城が開城され

るまでは、しばらく八王子城に在城していたという。ということは、明らかに池袋に寄っていないし、どう考えても前田利家は世田谷城に行っているとは考えられない。つまり、新編若葉の硝に書いてあること（利家が世田谷城を攻め落とし、池袋へ寄ったということ）は間違っていたと言える。

5. 古田織部が世田谷城を開城させたのか

新編若葉の硝に書いてあった“前田利家説”が違うのであれば、へうげものに書いてある“古田織部を含む南方軍”が世田谷城を開城させたのか。

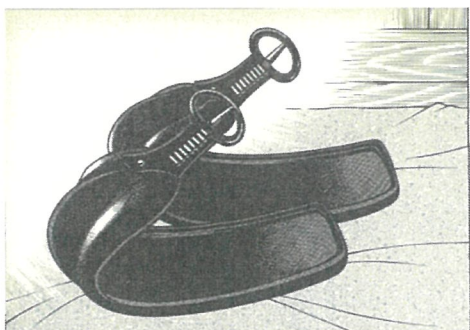
南方軍とは、豊臣秀吉による武蔵方面進軍命令の下、小田原城を囲んでいる部隊のうち、秀吉配下の浅野長吉(長政)・木村常陸介(重茲)を中心に、徳川家臣団(本多忠勝・鳥居元忠・平岩親吉)を加えて編成された軍のことだ。へうげものの主人公「古田織部」は、この南方軍の一員として参加していた。へうげもの7巻は、この南方軍の武蔵侵攻の様子を描いている。[図10]でわかるように、本多忠勝隊と古田織部が世田谷城を包囲し、開城要求を迫っている。また、[図12・13]では、吉良家伝来の馬具「武蔵鐙(むさしあぶみ)」を吉良氏と思われる人物から接收している。へうげものは漫画ではあるが、時代考証がとても素晴らしく、かなり史実に近く描いているようだ。だが、本当に本多忠勝隊と古田織部は世田谷城に行ったのだろうか。先行研究では、小田原城から江戸城までの経路は不明とのこと。その経路を絞り込むために、まずは小田原から江戸までの経路をあらゆる方法で考えてみた。



【図10】「へうげもの」(7)山田芳裕 P66 抜粋



【図11】「へうげもの」(7)山田芳裕 P67 抜粋



【図13】「へうげもの」(7)山田芳裕 P69 抜粋



【図12】「へうげもの」(7)山田芳裕 P70 抜粋

5-1 AIによる経路のシミュレーション

昔は徒歩が基本なので、目的地まで地形を考えながらなるべく楽な道(最短)で行こうとしていたはずだ。なので、小田原城から江戸城までの最短経路をAIでシミュレーションしてみた。文献では、小田原城から江戸城に行くまでの間に、玉縄城と小机城を経由したとされているので、生成内容は「小田原城から江戸城まで、玉縄城と小机城を経由した徒歩での最短の行き方を地図で教えてください」だ。



〔図 14〕 小田原城から玉縄城・小机城を経由、江戸城までの最短経路を Copilot にて生成(google マップより筆者抜粋)



〔図 15〕 小田原城から江戸城までの最短経路を Copilot にて生成(google マップより筆者抜粋)

小田原城から江戸城まで、玉縄城(鎌倉)、小机城を経由した最短距離をシミュレーションした結果、主に「**中原街道**」を通るルートになった。**このルートだと、世田谷城には寄っていない**〔図 14〕。ちなみに、どこにも経由せず小田原城～江戸城間を最短距離でシミュレーションを試したところ、世田谷城の近くの「**矢倉沢往還**」を通過するという結果になった〔図 15〕。また、小机城を経由していない説があるため、小机城を経由せず、玉縄城のみのシミュレーションも試した。すると、主に「**東海道**」を進軍するルート結果になった〔図 16〕。生成したのは現代の地図がもとだが、中原街道も東海道も後北条の頃からある重要な軍用道路だったため、中原街道のシミュレーションの結果は、当時の進軍ルートも同じような行程だったのではないかと考えられる。したがって、**AI のシミュレーションの結果では、古田織部含む南方軍は世田谷城近くの街道を通過していない可能性がある。**



〔図 16〕 小田原城から玉縄城のみを経由、江戸城までの最短経路を Copilot にて生成(google マップに筆者が加筆)

5-2 豊臣秀吉の禁制を追う

他にヒントとなるものはないだろうか。守谷市のデジタルミュージアムによると、「禁制を追う事で征討軍の進軍コースが読み取れます」とのこと。そこで、小田原城から江戸城の間に発行された豊臣秀吉の「禁制」を調査してみた。禁制とは、軍の大將が攻め先の村や寺社で兵の乱暴狼藉を禁止するために発行した物のことだ。秀吉は、関東各地に禁制を発行している。軍の通過しそうなところに禁制を配ったようだ。古田織部含む南方軍が、どこを進軍したのかわかるかもしれない。そう思い、小田原城から江戸城の間に発行した禁制を表にまとめ、それを地図に表してみた。[図 17・18]

No.	地域	場所	No.	地域	場所	No.	地域	場所
1	横浜	上大岡東・西	27	鎌倉	明月院	53	横浜	本郷寺
2	横浜	都岡保中二ヶ所	28	鎌倉	鎌倉市	54	横浜	津谷の庄
3	川崎	堀毛部作延郷	29	横浜	都筑区茅ヶ崎東	55	川崎	幸区
4	鎌倉	門賀寺	30	相模	平沢	56	世田谷	12ヶ村
5	鎌倉	建良寺	31	茅ヶ崎	鎌倉市村岡	57	江戸	牛込
6	鎌倉	鶴岡八幡宮	32	茅ヶ崎	高浜	58	横浜	法泉寺
7	鎌倉	二階堂郡中見園寺	33	茅ヶ崎	堤	59	横浜	称名寺
8	鎌倉	宝成寺	34	西足柄郡	大井町金子	60	横浜	杉田
9	鎌倉	長谷寺観音	35	厚木	金田	61	横浜	日野
10	鎌倉	松岡東慶寺	36	平塚	岡野	62	横浜	宝生寺
11	愛甲郡	愛甲町中津	37	南関	星谷寺	63	横浜	本田
12	小田原	勝福寺?	38	愛甲郡	愛甲町(加山)	64	横浜	本牧
13	横須賀	西来寺	39	小田原	酒匂川	65	横浜	小机茅ヶ崎
14	横浜	江島寺	40	小田原	柏山善栄寺	66	横浜	善福寺
15	厚木	厚木市	41	小田原	岡野津	67	川崎	小田小向
16	鎌倉	光明寺	42	小田原	曾我	68	横浜	小机東方
17	厚木	松野	43	横浜	今田	69	川崎	玉神寺
18	厚木	及川	44	中部	二宮町御沢	70	江戸	錦土寺
19	厚木	三田	45	海老名	本郷 恩馬	71	横浜	三保川
20	厚木	田村	46	横瀬	小磯	72	大井町	神山 藤窪
21	平塚	豊田	47	鎌倉	青蓮寺	73	伊勢原	大山
22	愛甲郡	清川村	48	鎌倉	太田寺	74	小田原	飯田岡
23	厚木愛甲郡	森庄	49	海老名	岡分尼寺	75	足柄上郡	岡成町
24	横浜	慈応院	50	平塚	八幡	76	足柄上郡	松田
25	鎌倉	長勝寺	51	鎌倉	妙本寺	77	茅ヶ崎	横島
26	鎌倉	鶴岡寺	52	鎌倉	本覚寺	78	厚木	七沢

[図 17] 小田原～江戸の間に配られた秀吉の禁制まとめ
(「豊臣秀吉文書集4」をもとに筆者作成)



[図 18] 小田原～江戸の間に配られた秀吉の禁制地図 筆者作成(google マップに筆者が加筆)

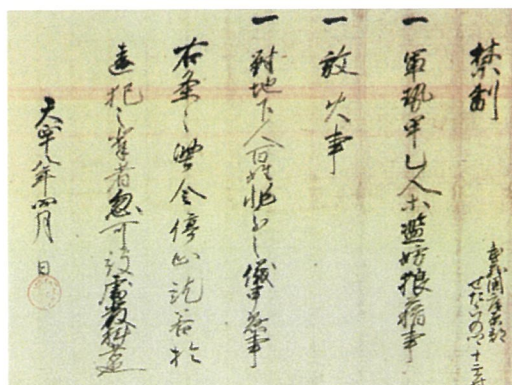
地図上の赤丸は禁制が配られた場所だ。小田原城～江戸城間に 78 枚が配布された。さら

に、この禁制地図に当時の主要な街道「矢倉沢往還」「中原街道」「東海道」と、経由した「玉縄城」「小机城」をのせてみることにする。[図 19]



[図 19] 小田原～江戸の間に配られた秀吉の禁制と主要街道 筆者作成(google マップに筆者が加筆)

小田原城から江戸城にかけて禁制だけで見てみると、南方軍は大井、松田、厚木にかけて矢倉沢往還を通して玉縄城に行っているようにも見える。問題は、世田谷城のある玉縄城から江戸城の間だ。小机近辺に 3 枚配布されていて、川崎近辺にも 2 枚配布されているが、ここではなんと世田谷城下にも配布されている [図 20]。AI が生成した最短距離だと、中原



[図 20] 世田谷村あてに書かれた秀吉の禁制(「大館蔵品展」より抜粋)

街道が有力であった。だが禁制を考りよすると、古田織部含む南方軍は矢倉沢往還を通して、世田谷城近辺を通過した可能性も出てくる。しかし、横浜歴史博物館が編集した「秀吉襲来」では、禁制から読み取るルートについて、「このあたり(世田谷)を通過して江戸城攻略へ向かったと考えられる」としつつも、「不明な点も多く、今後、修正する部分があるだろう」と書かれている。確かに厚木を経由して玉縄城に行くという遠回りについては説明がつかない。ということは、禁制を調

査した結果だけでは、古田織部含む南方軍が世田谷城を通過したかどうかはわからなかった。

5-3 古田織部の動向に日にちを加えてみた

それでは、地図に経路だけではなく時系列的な日にちを加えてみるとどうなるのだろうか。古田織部含む南方軍の、小田原城から江戸城の間の日付を調べてみた。文献に残っている場所と日付は[図 21]の通りだ。



[図 21] 古田織部含む南方軍の動向(google マップに筆者が加筆)

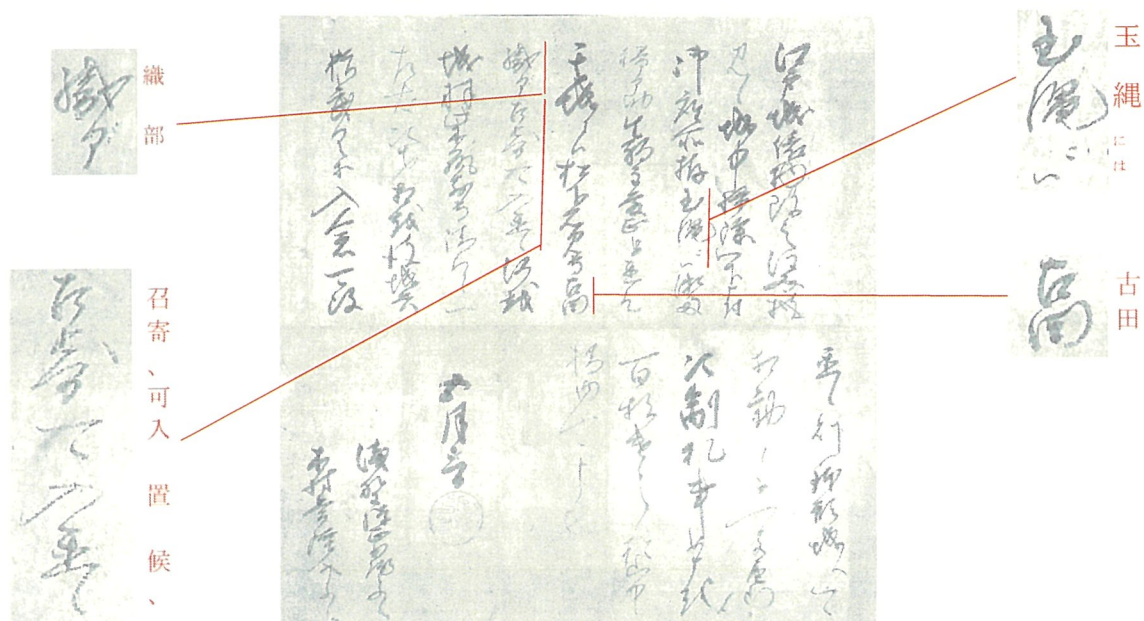
古田織部含む南方軍は、4月26日に小田原を出発し、同日26日夜に鎌倉(玉縄)に入った。翌日27日には江戸城に入城している。小田原城から玉縄城、玉縄城から江戸城まで、ともにおよそ40kmだ。昔の兵は1日におよそ40km歩いたと言われているから、この行程は1日で行けるちょうど良い進軍距離とも言える。ちなみに、玉縄城と江戸城40kmの間に小机城があるけれども、横浜市歴史博物館の阿諏訪さんによると「豊臣軍が小机城を囲ったという記録はない」とのことだから、小机城は通過されただけだと考える。そしてこの行程から考えると、江戸城までの道のりの間、仮に世田谷城近くを通ったとしても、古田織部は世田谷城に立ち寄る時間もなく、ましてや開城交渉に時間を費やしたとはとうてい考えられない。

5-4 江戸城出発後の古田織部の動向

もしや江戸城に入城した後の行程で世田谷城を接収したのか？そこで、江戸城出発以降の、古田織部の動向も調査することにした。その手掛かりになるのは、天正18年5月3日に浅野長吉・木村常陸介宛で書かれた豊臣秀吉の朱印状だ[図 22]。ここには、「玉縄城に古田織部を召し寄せて、入ってもらうように」ということが書かれている。5月3日に書かれた朱印状なので、おそらく、2~4日後の5月5~7日頃に浅野長吉・木村常陸介の手元に届いた

のだろう。それではどこで手紙を受け取ったのか。

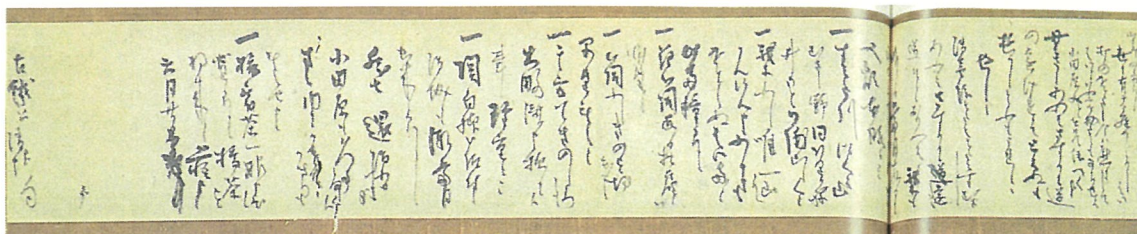
南方軍が5月1日に野田に陣を張ったとの記録が残っている。その後、小金城に行っている。小金城は5月5日に開城していて、その先の臼井城が5月10日に開城しているので、5月5～7日頃に朱印状が届いたとすると、遅くとも臼井城の手前で受け取っていると思われる。この秀吉の命令を受けた古田織部は、秀吉の命令に背いてまで世田谷城に立ち寄ったとは思えないので、直ちにその場所から玉縄城に向かったと考えられる。



〔図 22〕天正 18 年 5 月 3 日付けの秀吉朱印状に筆者が加

玉縄城に入城した古田織部はその後、どうしたのだろうか。古田織部美術館の中西さんによると、「(古田織部は)五月中はしばらく玉縄にいたようです」とのことなので、5月いっぱいには玉縄城に在城していたのだろう。その後の6月の動きはどうか。さては、この6月のタイミングで世田谷城に行ったのか？

ちょうどこの時期に、古田織部と千利休との間に手紙のやり取りがあった。「武蔵鐙の文」だ。これは、古田織部が書いた手紙に、千利休がお礼を書いた手紙だ。この中に「隅田川」・「筑波山」・「堀兼井」を見た、と古田織部が書いたのに対して、利休は「うらやましい」伝えている一文がある。この手紙が出されたのは、6月中旬から下旬だ。となると、古田織部



〔図 23〕千利休が古田織部宛に出した手紙「武蔵鐙の文」(本抜粋)

が千利休に手紙を出したのは6月初旬と考えるのが適切だ。5月いっぱいまで玉縄城にいた

古田織部が6月下旬に千利休から返事もらったとすると、6月初旬に「堀兼井」に立ち寄ったその後、南方軍と再合流していたと考えられる。

そこでこれまで調査してきた日付を図にまとめて表してみることにする。[図 24]



[図 24] 古田織部の動向を時系列の図で表してみた 筆者作成(google マップに筆者が加筆)



[図 25] 野田から筑波山が見えるかどうかを野田へ検証しに行った。古田織部が言っている通り、見事に筑波山が目に見えてきた。古田織部が5月1日に南方軍の一員として野田に来たのは間違いないだろう。(筆者父撮影)

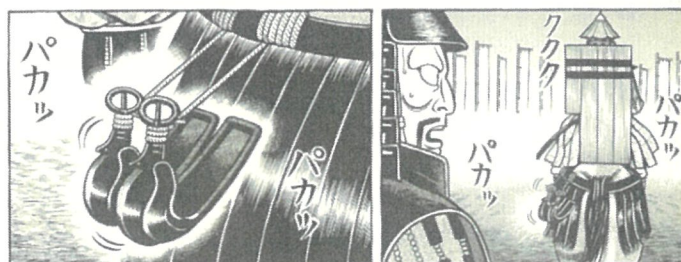
つまり、古田織部は玉縄城から鉢形城に向けて北進しており、このタイミングで世田谷城に立ち寄るとなると大まわりになる。よって **6 月も古田織部が世田谷城に寄って開城交渉している日や時間は明らかに無い。**



〔図 26〕 玉縄城と筆者(筆者父撮影)

5-5 武蔵鎧の行方

さらに、へうげもので古田織部が世田谷城内で武蔵鎧という馬具を接收する場面がある〔図 12〕が、武蔵鎧は本当に存在するものなのか、この辺りも調査してみた。古田織部は江戸時代には徳川家の家臣でもあったので、徳川家に吉良家伝来の武蔵鎧が残されているかもしれない。そう思い、まずは徳川記念財団、徳川美術館、久能山東照宮博物館に話を聞いてみた。質問内容は、「**吉良家伝来の武蔵鎧という馬具は所蔵品の中にありますか**」だ。徳川記念財団は小糸さん、徳川美術館は学芸員さん、久能山東照宮博物館は戸塚さんにお答えいただいたが、すべての皆さんの回答は「**そのような所蔵品はありません**」だった。どうやら徳川家の所蔵品を管理されているところでは吉良家伝来の武蔵鎧は存在しないようだ。



〔図 27〕「へうげもの」(7)山田芳裕 P78 抜粋

もしかすると古田織部の美術館に残っているかもしれない。このことを古田織部美術館の中西さんに「**吉良家伝来の武蔵鎧という馬具は所蔵品の中にありますか**」と聞いてみたところ、徳川家と同様に「**今のところ、吉良家伝来の武蔵鎧は確認できておりません**」との回答をいただいた。さらには古田織部と武蔵鎧のエピソードは千利休との手紙〔図 23〕での出来事であり、「**武蔵鎧はあくまで歌枕(伊勢物語)の一つと考えている**」とも教えてくれた。

つまり、古田織部と武蔵鎧の関係は、へうげもので言う馬具の「武蔵鎧」ではなく、枕詞としての「むさしあぶみ」であり、へうげものが描いていた「武蔵鎧」のやりとりは、架空のシーンだと考えられる。よって、古田織部が世田谷城で武蔵鎧を接收したとする説は可能性が低く、それによって古田織部が世田谷城に来た可能性も低くなる。

これまで古田織部含む南方軍について調査してきたことをまとめるとこうなった。

- ◆ AI による小田原城から江戸城の最短経路のシミュレーションの結果では世田谷城近くを通っていない
- ◆ 豊臣秀吉の禁制を配布した場所から進軍ルートを追ってみると、古田織部が世田谷城に寄れたかどうかわからなかった
- ◆ 古田織部の動向を小田原から江戸、江戸以降の玉縄、その後の鉢形までを時系列にまとめると、古田織部は世田谷城に寄れていなかった
- ◆ 古田織部に関係する吉良家伝来の武蔵鎧は、徳川家関係や古田織部関係の美術館などには残されていない
- ◆ 武蔵鎧は馬具のことではなく枕詞だった

以上のことから、古田織部は世田谷城に関わっておらず、へうげものの世田谷城接收の箇所は創作である。古田織部は世田谷城開城交渉もしていないし、世田谷城接收もしていなかったと言える。

5-6 吉良家伝来の行方

しかし、敵が攻めてきて接收されることが事前に分っていれば、吉良家伝来の大切なものを城外へ持ち出しておくこともあるのではないか。豊臣秀吉の禁制が事前に世田谷へ配布されていたので、豊臣方が攻めてくるかもしれないということは分かっていたはず。もし大切なものを持ち出して隠しておく場所となれば、現実的に世田谷城近くの吉良家との関係が深いお寺さんが考えられる。実際にお寺さんへ行って調査してきた。

インタビューしたのは、「勝光院」「勝国寺」「円光院」「実相院」だ。勝光院は1335年に吉良家が建立、1573年に吉良氏朝が中興開基した。勝国寺は1554年吉良政忠が開基、世田谷城の裏手鬼門除けとして建立された。円光院は天正年間に世田谷吉良氏の祈願所として建立される。実相院は開基が吉良氏朝とも、嫡子の頼久とも言われているので、おそらく1590～1609年頃に建立されたと考えられる。すべて吉良家との縁が深いお寺だ。インタビューは、「天正18年頃に吉良家から頂いたもの、預けられたものはありますか」という内容だ。

答えていただいたのは、この4ヶ寺の住職さんたちだ。これらすべてのお寺で、「吉良家から頂いたものや預けられたものはない」と言われた。そもそも吉良家から伝来されたものは現代にはない、というニュアンスだった。勝国寺さんにおいては太平洋戦争時にお寺が焼いだんにより被害を受けたとのことで、「戦争前に存在していたかどうかは分からない」ともお聞きした。吉良家伝来の大切なものが、吉良家と縁の深い4ヶ寺にまったくくないことは、世田谷城は接收されていない可能性はさらに高まる。



〔図 28〕 勝光院(筆者撮影)



〔図 29〕 世田谷城とお寺の位置関係
(google マップに筆者が加筆)



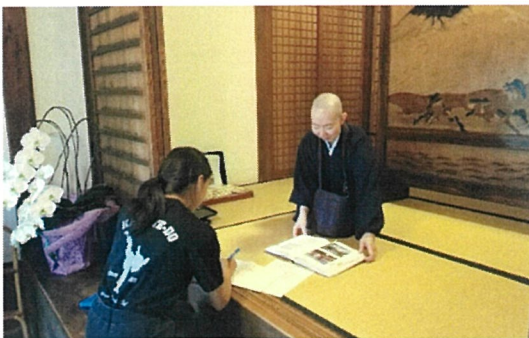
〔図 30〕 勝国寺(筆者父撮影)



〔図 31〕 実相院(筆者撮影)



〔図 32〕 円光院(筆者撮影)



〔図 33〕 勝光院の住職さんと筆者(筆者母撮影)



〔図 34〕 勝国寺の住職さんと筆者(筆者父撮影)



〔図 35〕 実相院の
住職さんと筆者
(筆者母撮影)



〔図 36〕 円光院の住職さんと筆者(筆者母撮影)

ではいったい誰が世田谷城を接収したのだろうか。徳川家康の家臣である戸田忠次が、南方軍より先の4月24日に小田原から江戸城を受け取りに行っているが、戸田忠次も世田谷城に寄ったという記録がない。

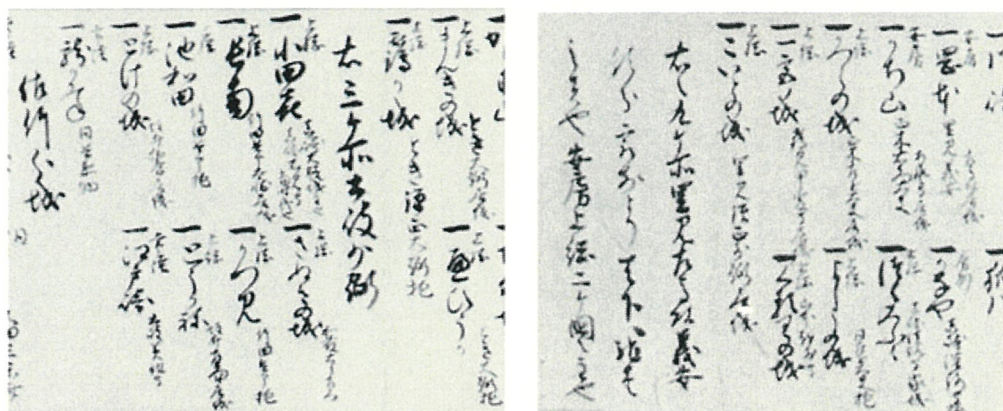
もしかして、世田谷城は豊臣方から無視されていたのか!?

6. 豊臣軍から無視されていた世田谷城

豊臣軍が小田原合戦前、事前に調査して書き記した「関東八州諸城覚書」という文書が残されている。文書は2種類あり、1つは「関東八州城々ノ覚書」もう1つは「関東八州城之覚」だ。合わせて106ヶ所の後北条の城が書かれている。しかし、この文書を調べたところ両文書とも世田谷城がのっていない。

No.	城の名前	A	B	No.	城の名前	A	B	No.	城の名前	A	B
1.	小田原(小田原城)	○	○	37.	さくら(佐倉城)	○	○	72.	柿のかの城(柿の賀)(柿岡城)	○	○
2.	玉縄の城(玉縄城)	○	○	38.	白井城(白井)(白井城)	○	○	73.	結木晴友(結城晴友)	○	○
3.	三浦見崎(三崎城)	○	○	39.	こかね井城(こかね)(小金城)	○	○	74.	結木の城(結城)(結城城)	○	○
4.	田原ノ城(田原)(田原城)	○	○	40.	ふ川之城(深川)(?)	○	○	75.	下たての城(下館城)	○	○
5.	つくいの城(つく井)(津久井城)	○	○	41.	わう大ノ城(大だい野)(?)	○	○	76.	しんち(新地)	○	○
6.	油壺(新井城?)	○	○	42.	かふらき城(かふら木)(備木城)	○	○	77.	山川の城(山川氏館)	○	○
7.	にら山(蘆山)(蘆山城)	○	○	43.	矢はきの城(矢はき)(矢作城)	○	○	78.	下妻ノ城(下妻城)(下妻城)	○	○
8.	下田ノ城(下田)(下田城)	○	○	44.	とうかねの城(とうかね)(東金城)	○	○	79.	宮屋(宮谷城)	○	○
9.	岩月ノ城(岩つき)(岩槻城)	○	○	45.	とけの城(土気城)	○	○	80.	宇津の宮友綱(宇都宮友綱)	○	○
10.	松山ノ城(松山)(松山城)	○	○	46.	長南之城(長南)(序南城)	○	○	81.	宇津の宮城(宇津宮)(宇都宮城)	○	○
11.	竹山城(滝山)(滝山城)	○	○	47.	池和田之城(池和田)(池和田城)	○	○	82.	もうかのしろ(もう賀ノ城)(真岡城)	○	○
12.	水見城(水見)(水海城)	○	○	48.	かつみの城(かつみ)(勝見城)	○	○	83.	上ミね川ノ城(かみの川)(上三川城)	○	○
13.	間宿(間宿城)	○	○	49.	まん木ノ城(まんきの城)(万木城)	○	○	84.	川崎ノ城(川崎)(川崎城)	○	○
14.	栗橋(栗橋城)	○	○	50.	へびうかの城(へびうか)(?)	○	○	85.	狐川(喜連川)	○	○
15.	小山(小山城)	○	○	51.	霧賀ノ城(霧か城)(?)	○	○	86.	贈子ノ城(まじ子ノ城)(益子古城)	○	○
16.	江之本(江本)(榎本城)	○	○	52.	大田之城(大田城)(大田城)	○	○	87.	西方ノ城(西方城)	○	○
17.	川越城(河越)(川越城)	○	○	53.	江戸ノ城(?)	○	○	88.	空閑之城(空閑ノ城)(空閑城)	○	○
18.	江戸ノ城(江戸)(江戸城)	○	○	54.	石塚の城(石塚城)	○	○	89.	奈須降祐(?)	○	○
19.	をしの城(おし)(忍城)	○	○	55.	藤田城(館田城)	○	○	90.	からす山城(からす山)(鳥山城)	○	○
20.	はちかたの城(はちかた)(鉢形城)	○	○	56.	大山之城(大山城)	○	○	91.	千穂之城(せんほ城)(千本城)	○	○
21.	くらかね(倉賀野城)	○	○	57.	野口ノ城(野口)(野口城)	○	○	92.	大田原ノ城(大田原城)	○	○
22.	ふかや(深谷城)	○	○	58.	片野城(片野)(片野城)	○	○	93.	壺山の城(佐久山城)	○	○
23.	みのわ(箕輪城)	○	○	59.	小田之城(小田)(小田城)	○	○	94.	さつミ義晴(里見義晴)	○	○
24.	前橋(前橋城)	○	○	60.	藤沢之城(藤沢)(藤沢城)	○	○	95.	岡本之城(岡本)(岡本城)	○	○
25.	沼田(沼田城)	○	○	61.	きなまり城(きなまり)(?)	○	○	96.	かなや(金谷城)	○	○
26.	松枝之城(松井田)(松井田城)	○	○	62.	筑葉(筑波?)	○	○	97.	かち山之城(かち山)(勝山城)	○	○
27.	皆川の城(みな川)(皆川城)	○	○	63.	土浦の城(土浦)(土浦城)	○	○	98.	つくろふ城(つくろふミ)(造海城)	○	○
28.	とちき(とちき)(?)	○	○	64.	十崎之城(十崎城)	○	○	99.	さぬき城(さぬきの城)(佐賀城)	○	○
29.	とみたの城(とみ田)(富田城)	○	○	65.	ゑびか嶋城(ゑびか崎)(海老ヶ島城)	○	○	100.	小いとどの城(こいとどの城)(秋元城)	○	○
30.	なんまノ城(なんま)(南摩城)	○	○	66.	花室(花室)	○	○	101.	くるりの城(久留里城)	○	○
31.	ミぶの城(壬生)(壬生城)	○	○	67.	外崎(外崎)	○	○	102.	かつらの城(勝浦城)	○	○
32.	かのまノ城(かのま)(籠沼城)	○	○	68.	苜中ノ大条(?)	○	○	103.	まじうの城(吉字城)	○	○
33.	日光山(日光山)	○	○	69.	苜中ノ城(苜中)(苜中城)	○	○	104.	一宮ノ城(一宮城)	○	○
34.	江戸崎城(江戸崎)(江戸崎城)	○	○	70.	まくの城(馬加城)	○	○	105.	おつ木の城(興津城)	○	○
35.	龍が瀬(龍かみね)(松ヶ瀬城)	○	○	71.	まかへノ城(真壁城)	○	○	106.	おたきの城(小田喜)(小田喜城)	○	○
36.	木原(木原城)	○	○								

〔図 37〕 関東八州城々ノ覚書(A)と関東八州城之覚(B)(「毛利家文書」より筆者がまとめてみた)



〔図 38〕 関東八州城之覚(毛利博物館蔵、『房総の城』館山市立博物館より引用)

〔図 37〕でもわかるように豊臣軍(浅野長吉など南方軍)の進軍ルートを見てみると、ここに書かれた城々をターゲットにして進んでいることが分かる。この文書にのっている城は、のちにほぼ攻められていると言っても過言ではない。

また、豊臣側が制作した後北条側の主要な武将名と、その人物が持っている騎数を記した文書「北条氏人数覚書」にも、**世田谷城城主、吉良氏朝の名前がのっていない**。

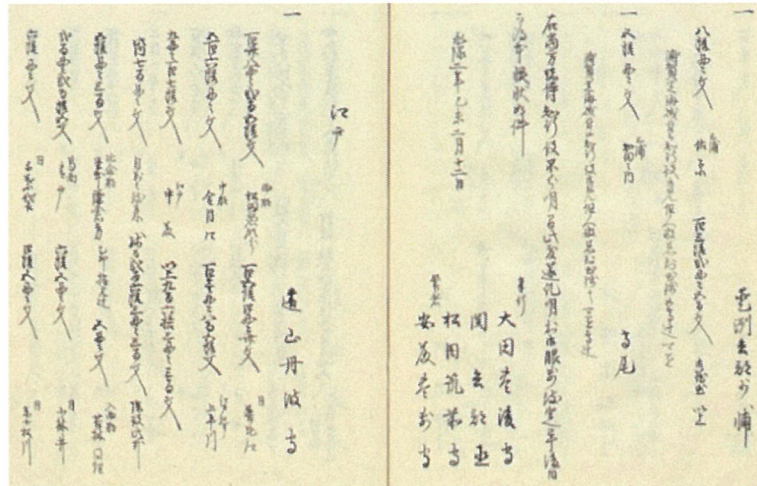
番号	武将名	騎数	番号	武将名	騎数
1	北条氏直	馬廻700	19	大藤直昌	50
2	北条氏政	馬廻500	20	皆川広照	1000
3	北条氏邦・直定	5000	21	壬生義雄	1500
4	北条氏照	4500	22	土岐治綱	1500
5	北条氏房	1500	23	小窪胤通	500
6	北条氏勝	700	24	相馬治胤	100
7	北条氏規	500	25	千葉邦胤・直重	3000
8	北条氏忠	300	26	原胤栄	2000
9	宮根寄斎	300	27	高城胤則	700
10	北条氏光	150	28	豊島貞継	150
11	松田憲秀・直秀	1500	29	板野刑部大夫	150
12	大道寺政繁・直繁	1500	30	簗木駿河	300
13	遠山右衛門尉	1000	31	土岐義成	1500
14	成田氏長	1000	32	酒井政辰	150
15	依田大膳亮	300	33	酒井政茂	300
16	清水康英	200	34	武田豊信	1500
17	山角康定	150	合計		34350
18	内藤綱秀	150			

〔図 39〕 北条氏人数覚書(「毛利家文書」より筆者がまとめた)

豊臣方としては世田谷城を北条方の城として認識しておらず、世田谷城の城主である吉良氏朝のことも北条家臣として認識していない。これらのことから考えると、やはり、**豊臣方から世田谷城は無視されていた可能性が高い**。

7. 後北条にも無視されていた？

一方の後北条側からは、世田谷城と吉良氏朝はどのような扱いであったか。後北条が作成した家臣の所領や貫高、軍役などの普請役を記した「小田原衆所領役帳」を見てみた。

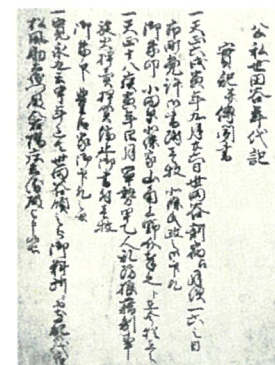


〔図 40〕小田原衆所領役帳

後北条の家臣団およそ 460 人(筆者調べ)がこの役帳にのっていたが、**この中に吉良氏はのっていなかった**。これは無視されていたわけではなく、吉良氏は自分たちの家臣ではない独立した国衆という認識であったようだ。後北条の一族である北条氏勝が玉縄城から江戸城まで南方軍の道案内をした話があるが、家臣団ではない者の城や覚書にない世田谷城を氏勝が道案内したとはとても考えられない。

7. 古文書の中で見つけた！世田谷城に寄手はなかった！

「公私世田谷年代記」という、世田谷の歴史が書かれた文書が残されている。吉良氏の四天王であった大場家の子孫である弥十郎が天保 5 年(1834 年)に書いた書物だ。内容の全般は大場家に残されていた古文書で編成されている。この文書の中に天正 18 年のことが書かれていた。内容は「小田原籠城之由。世田谷城留守之處、大坂方々関東之城々悉攻落、世田谷城寄手不レ被レ向内明退キ、武州之内蒔田と申在郷へ退キ、塾居致候由。」だ。どうも世田谷城のことが書かれていたので、これを AI で現代語に訳してみた。



〔図 41〕公私世田谷年代記

小田原城で籠城が行われているという知らせを聞きました。私たちが世田谷城に留守番として残っていたところ、大坂方(豊臣軍)が関東の城を次々と攻め落としています。幸いなことに、**世田谷城には敵が攻めてくることなく**、私たちは自ら城を明け渡して退きました。その後、武蔵国にある蒔田という村に退避し、そこでひっそりと暮らしています。

〔図 42〕「公私世田谷年代記」天正 18 年の部分を Google Gemini で現代語に訳した

なんとここには「**世田谷城には敵が攻めてくることなく**」と記されていた。

念のためほかの AI も調べてみた。Microsoft Copilot では「世田谷城寄手不レ被レ向内明退キ」を「世田谷城には敵が寄せることなく」と訳した。

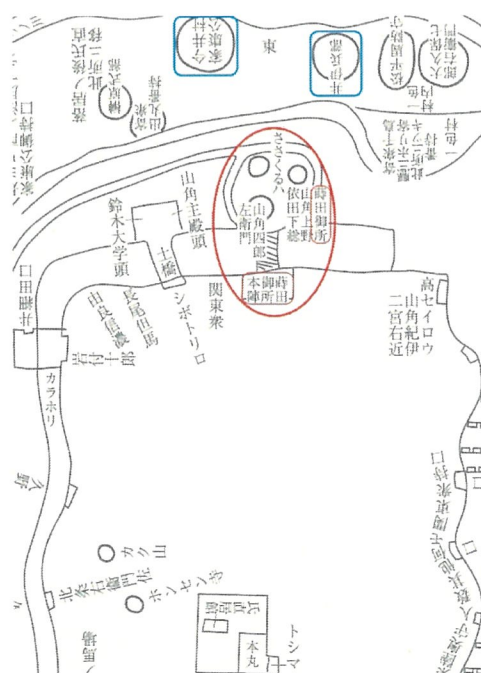
このことについて世田谷区立郷土資料館の角和さんに、AI の現代語訳に間違いがないかと聞いてみたところ「一部意味不明な訳はあるものの、世田谷城に敵がこなかった点については間違いない」と言われた。ということは、

世田谷城は自ら開城し、誰にも接收されていなかった。

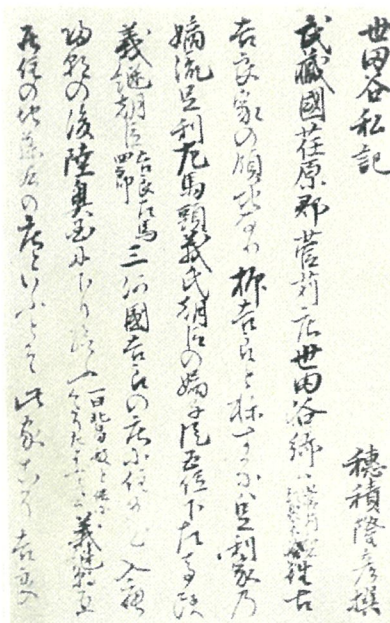
8. 世田谷城廃城の行方と城主吉良氏朝

世田谷城は接收されていないとなると、世田谷城はどのように廃城になったのか。城主である吉良氏朝は何をしていたのか。

豊臣秀吉軍が小田原城を取り囲んでいた頃、世田谷城の城主である吉良氏朝は、小田原城の篠曲輪を守備していた。この篠曲輪は6月22日、徳川家臣である井伊直政によって攻撃され、落とされている。その後の氏朝の動向は不明だが、小田原城落城の頃か、そのあとに、千葉の生実(現在の千葉市中央区生実町)に潜伏している。



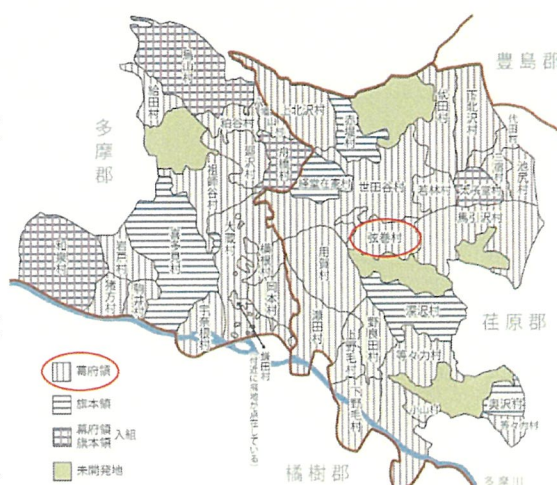
〔図 43〕小田原陣図に筆者が加筆(赤丸の中の「篠曲輪」は吉良氏朝のこと、青四角は徳川家康陣と井伊直政陣)



〔図 44〕穂積隆彦「世田谷私記」寛政9年(1797年)世田谷区史より抜粋

その後、氏朝はすぐに江戸城にて徳川家康に謁見し、氏朝の嫡子の吉良頼久は家康から千葉寺崎に1125石をたまわり、旗本として召しだされる。氏朝自身も家康に召し出され世田谷に帰ってきたが、世田谷城は廃城あつかいとなっていたため世田谷城には居城せず、

世田谷城近くの家康からたまわった拝領地に身を移し、そこで隠居した。ここで不思議なのは、千葉に潜伏していた氏朝が江戸入府直後の家康に謁見しているという点だ。潜伏していたにも関わらず、9月1日に江戸に入府した直後に謁見し、9月9日に世田谷の地をたまわっている。ちょうどこの頃、世田谷城に残された吉良家家臣の大場房勝が氏朝のことを搜索していたにもかかわらずだ。これは前もって家康と話が通っていたとも考えられるが、このスピード感を見ると、かなりの高待遇で扱われたのは事実だろう。世田谷城を廃城させるにあたって、徳川家康はなにかしらの配慮があったと考えるのが適切だ。



〔図 45〕徳川家康入府直後の世田谷知行図、吉良氏朝が拝領したとされる地は、幕府直轄領だった。家康が直々にもらったのは間違いない。
(「世田谷往古来今」より抜粋、筆者赤丸加筆)

9. 吉良下屋敷と実相院

氏朝にとって、世田谷城を廃城するにあたり家康から何かしら配慮があったと考えるが、それは何だろう。この時代の価値があるものの一つに「土地」がある。氏朝が家康からたまわったものが「世田谷の土地」なので、もしかするとその「世田谷の土地」のことを調べれば廃城の謎が分かるかもしれない。

それを探るため、氏朝が隠居した吉良拝領地を調べてみることにした。

この地図〔図 47〕は、江戸時代の文化3年(1806年)作成「世田谷領二十ヶ村絵図」だ。〔図 47〕の下の方に「吉良下屋敷」と描いてある〔図 48〕。当時、江戸時代吉良家の居屋敷(上屋敷)は本所林町(現在の墨田区立川)にあったので、弦巻村(現在の世田谷区弦巻)は下屋敷と言われていたのであろう。「目黒筋御場絵図」(文化3年 1806年)には「吉良拝領地」として描かれている。吉良下屋敷のとなりにある実相院も、氏朝の土地に建立したので、家康からたまわった拝領地に建っていることになる。

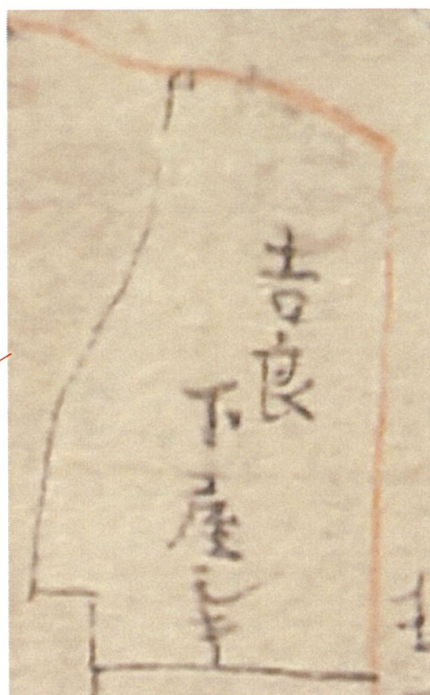
この江戸時代「吉良下屋敷」のはんいは、幕府2代将軍秀忠に確定された。家康から口約束的に拝領した地を秀忠によって正式な拝領地にしてもらい、その際に実相院との土地を切り離したと考えられる。秀忠に承認してもらったのは3,000坪とのこと。この3,000坪と実相院の土地をたせば、おのずと氏朝が家康にたまわった土地の全部のはんいが分かるはずだ。だが、実相院の広さを特定しにくい。



〔図 46〕「目黒筋御場絵図」より筆者抜粋文化3年(1806年)に描かれたこの地図にも吉良拝領地と書かれている。



〔図 47〕「世田谷領二十ヶ村絵図(世田谷区郷土資料館ご提供)」に筆者が加筆、青丸は世田谷城跡、赤丸は吉良下屋敷、世田谷城から吉良下屋敷まで直線距離だとしておよそ 700m だ。



〔図 48〕「世田谷領二十ヶ村絵図(世田谷区郷土資料館ご提供)」より吉良下屋敷の部分をかき大



〔図 49〕 現代の吉良下屋敷跡地(筆者撮影)マンションが建てられていて下屋敷の面かげが一角に残されている



〔図 50〕 現代の吉良下屋敷跡地(筆者撮影)



〔図 51〕「世田谷領二十ヶ村絵図(世田谷区郷土資料館ご提供)」
に筆者が加筆、右の赤丸が吉良下屋敷、左の赤丸が実相院



地図をよく見てみると、この地図は神社やお寺の土地の広さを「木」の絵で示していることを発見した。これだと南側にある蛇崩川をこえ、川にそって東へ向かい、家が描かれていないところをまがり、吉良下屋敷の南側までの範囲が特定できる。この木を含めた広さを実相院の住職さんにお聞きしたところ「そうだったかもしれない」と言われた。確かに読売新聞社の「東京新地図」によると、実相院は太平洋戦争後の農地解放により持っていた土地をたくさん手放したとのことだ。



〔図 52〕「世田谷領二十ヶ村絵図」(世田谷の土地)よりトレース図抜粋、勝光院の土地の範囲、木ではんいを表現している

さらに実相院の住職さんから「実相院の北側も実相院の土地だった」と教えて頂いた。地図や資料だけではわからない貴重な情報だ。これらの情報をもとに、「世田谷領二十ヶ村絵

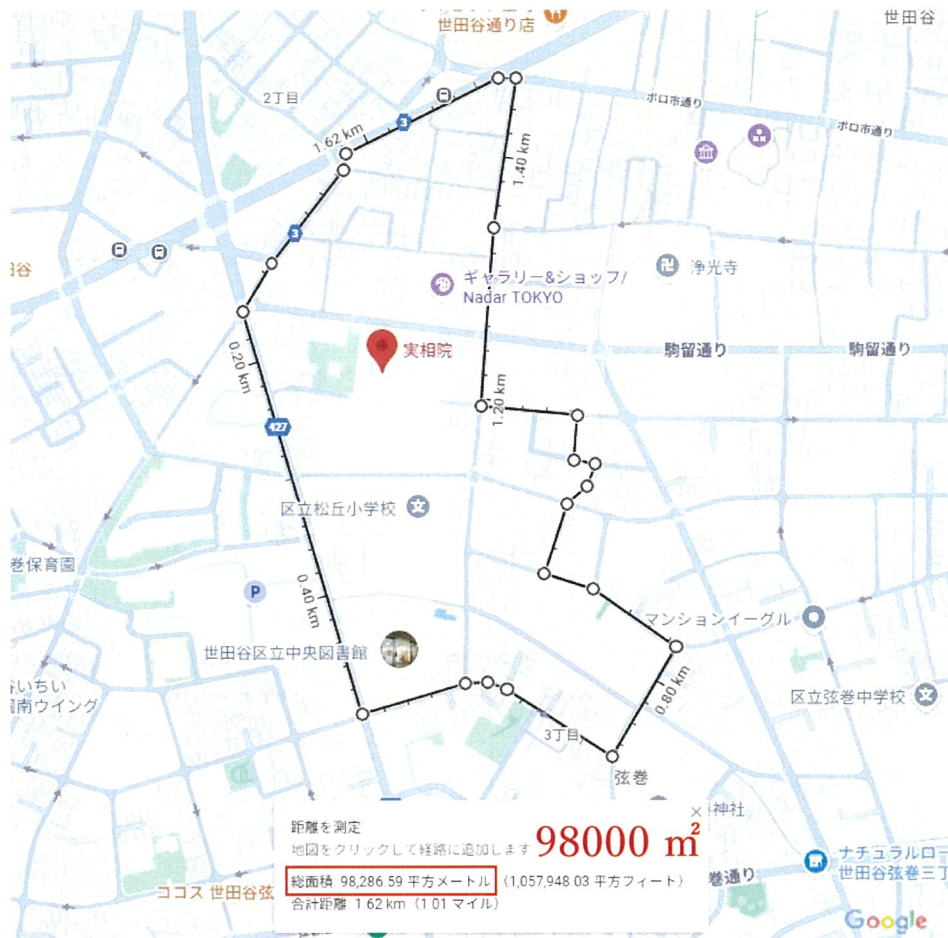
図」を見ながら、現代の地図の場所とはんいを特定するために現地で調査してきた。



[図 53]「世田谷領二十ヶ村絵図(世田谷区立郷土資料館ご提供)」
に筆者が加筆、赤の線は氏朝が家康に拝領した土地の想定図

赤の線は実相院の土地と吉良下屋敷を足したはんいだ。道のつくりは一部家が建っているものの、ほぼ当時のままだった。川は暗きょされているが、流れていた場所やまがり方は現代と全く同じ。別のものだが、偶然にもはんいを示していた「木」が同じ場所に植えられていた。

この調査をもとに、家康からの吉良拝領地の面積を測ってみた。



〔図 54〕 実相院の総面積(google マップに筆者が加筆)



〔図 55〕 吉良下屋敷の総面積
(google マップに筆者が加筆)

Google マップの「距離を測定」機能を使った結果、およそ 98,000 平方メートルだった。読売新聞社の東京新地図によると戦前の実相院は「60,000 平方メートル以上はあった」とのことなので、氏朝の頃でこの広さは妥当だと言える。

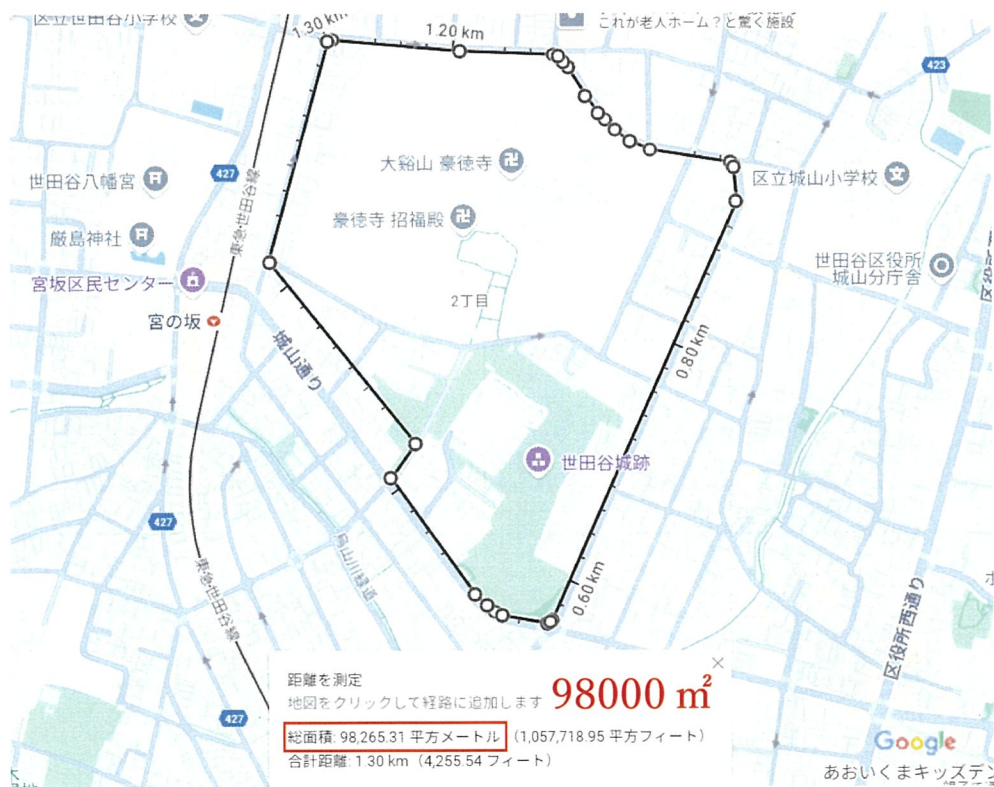
ちなみに秀忠に承認された吉良下屋敷も世田谷領二十ヶ村絵図をもとに想定して測ってみた。すると資料に書かれていた通り、見事に 3,000 坪 (10,110 平方メートル) だった。

※10,110 平方メートル ÷ 3,3057 = 3,058 坪



そして、世田谷城の面積も測ってみた。参考にしたのは「世田谷の中世城塞」の中で、三田義春氏が想定した「世田谷城想像図」をもとに、測ってみた。

〔図 56〕「世田谷の中世城塞」より、三田義春氏の「世田谷城想像図」に筆者が加筆



〔図 57〕世田谷城の総面積(google マップに筆者が加筆)

なんと、家康が氏朝に与えた拝領地と総面積がまったく同じ 98,000 平方メートルだった。家康の配慮とは「世田谷城と世田谷城と同じ広さを持つ弦巻村の土地を、相対替(交換)した」ということだと考えられた。このことを父に話したところ「これ、等価交換じゃない？」と言われたので、その言葉をいただき、この説を「等価交換説」と名付けることにした。

10.まとめ

今回の調査で、世田谷城を攻め、開城させたのは世間で言われている前田利家ではなく、古田織部でもないことを証明した。また世田谷城は豊臣軍から攻められて接収されたわけでもなく、自ら開城したことが分かった。そして、今回の発見は世田谷城と拝領地が、偶然とはいえ、同じ広さだったことだ。「家康は氏朝に対して、世田谷城を廃城する代わりに、世田谷城と同じぐらいの広さの土地をあたえていた(等価交換)」ということを筆者の新説として、今回は終わりにする。

<参考文献>

1. 世田谷区政策経営部政策企画課区史編さん『世田谷 往古来今』世田谷区政策経営部政策企画課区史編さん 2018年 P67～73
2. 海老澤了之介『新編若葉の梢』新編若葉の梢刊行會 1958年 P427
3. 黒田基樹『戦国大名領国の支配構造』岩田書院 1997年
4. 旧参謀本部『小牧・九州・小田原の役/日本の戦史④』徳間書店 P249～253
5. 下山治久『小田原合戦－豊臣秀吉の天下統一』角川書店 1996年 P134～150・160・181
6. 品川区立品川歴史館『中原街道』品川区立品川博物館 2010年
7. 谷口雄太『中世足利氏の血統と権威』吉川弘文館 2019年
8. 西股総生『東国武将たちの戦国史』河出書房新社 2015年
9. 黒田基樹『小田原合戦と北条氏』吉川弘文館 2013年
10. 黒田基樹『戦国北条氏五代』戎光祥出版 2012年
11. 東京都世田谷区『世田谷区史料－第一集』東京都世田谷区 1958年 P40・43・64・65
12. 東京都世田谷区『世田谷区史料－第二集』東京都世田谷区 1959年 P194・195
13. 世田谷区郷土資料館『大館蔵品展』世田谷区郷土資料館 2014年 P51・52
14. 世田谷区立郷土資料館『豪徳寺 文化財総合調査報告』世田谷区教育委員会 1987年 P4・141
15. 世田谷区立郷土資料館『勝光院 文化財総合調査報告』世田谷区教育委員会 1992年 P12
16. 世田谷区近世史編さん委員会『世田谷区史 近世編』世田谷区 2025年 P153～157
17. 世田谷区郷土資料館『世田谷の土地－絵図と図面を読み解く－』世田谷区郷土資料館 2015年 P26～35
18. 株式会社創史社編『日本城郭体系第6巻千葉・神奈川』新人物往来社 1980年 P300

～303・P336～339

- 19.名古屋市博物館『豊臣秀吉文書集4 天正17年～18年』吉川弘文館 2018年 P121～148・161
- 20.東京大学史料編纂所『大日本古文書家わけ二 浅野家文書』東京大学出版会 1968年
- 21.東京大学史料編纂所『大日本古文書家わけ八 毛利家文書三』東京大学出版会 1979年
- 22.東京大学史料編纂所『大日本古文書家わけ八 毛利家文書四』東京大学出版会 1970年 P493～507
- 23.荻野三七彦『関東武士研究叢書第四卷 吉良氏の研究』名著出版 1975年
- 24.大場家歴代史編纂委員会『大場家歴代史』大場代官屋敷保存会 世田谷信用金庫 1983年 P402～403
- 25.山田芳裕『へうげもの7』講談社 2008年 P66～78
- 26.読売新聞社『東京新地図』読売新聞社 1968年 P378～379
27. 紀元二千六百年記念房総叢書刊行会『房総叢書：紀元二千六百年記念第4巻 史傳其二』1941-1944年 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1038144> (参照 2025-07-30) P132
- 28.『小田原衆所領役帳』1559年 国立公文書館デジタルアーカイブ <https://www.digital.archives.go.jp/img/1248462> (参照 2025-08-06) P31
- 29.『房総の城』館山市立博物館 <http://history.hanaumikaidou.com/archives/7746> (参照 2025-08-22)
- 30.村井康彦『図説 | 千利休—その人と芸術』河出書房新社 1989年 P72・73
- 31.世田谷区政策経営部政策企画課区史編さん担当『世田谷 第4号』世田谷政策経営部政策企画課区史編さん担当 2024年 P36～45
- 32.横浜市歴史博物館『特別展 秀吉襲来—近世関東の幕開け—』横浜市歴史博物館 1999年 P52～69
- 33.田中祥彦『多摩丘陵の古城址』有峰書店新社 1985年 P30～31・68～73
- 34.黒田基樹『戦国北条家一族事典』戎光祥出版 2024年
- 35.黒田基樹『北条早雲とその一族』新人物往来社 2007年
- 36.公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター『横浜教育委員会埋蔵文化財調査報告書1』公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 2024年 P76～79
- 37.港北区郷土史編さん刊行委員会『港北区史』港北区郷土史編さん刊行委員会 1986年
- 38.郷土の歴史を未来に生かす事業実行委員会『青葉のあゆみ』郷土の歴史を未来に生かす事業実行委員会 2009年
- 39.世田谷区立郷土資料館『世田谷の歴史と文化』世田谷区立郷土資料館 2014年 P40～41
- 40.佐藤貴浩『伊達政宗の小田原参陣と浅野長吉』佐藤貴浩 2013年 P12～18

41. 上田正昭 etc 『日本人名大辞典』 講談社 2001 年 P654
42. 江戸幕府 『目黒筋御場絵図』 国立公文書館デジタルアーカイブ
<https://www.digital.archives.go.jp/img.L/1259553>(参照 2025-09-07)
43. Google Gemini <https://gemini.google.com/app?hl=ja>
44. Microsoft Copilot
<https://www.microsoft.com/ja-jp/microsoft-copilot/for-individuals?form=MY02P9>
45. 東京都世田谷区教育委員会 『世田谷の中世城塞』 東京都世田谷区教育委員会 1979 年

<表紙写真>

彦根藩「世田谷領二十ヶ村絵図」1806 年 世田谷区立郷土資料館ご提供

<スペシャルサンクス>

円光院 住職さん
久能山東照宮博物館 戸塚さん
実相院 住職さん
勝光院 住職さん
勝国寺 住職さん
世田谷郷土資料館 角和さん
徳川記念財団 小糸さん
徳川美術館 学芸部さん
古田織部美術館 中西さん
横浜市歴史博物館 阿諏訪さん
お父さん・お母さん



世田谷区立郷土資料館の
角和さんと筆者(筆者父撮影)



横浜市歴史博物館の
阿諏訪さんと筆者(筆者父撮影)

ありがとうございました！